

2022年1月9日（日）上演⑩

静岡県立静岡城北高等学校

## 「東京ローズ」

### 私の言葉に翼がはえて」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

戸塚 愛実（東京都立北園高等学校1年）

会いたくても会えない大切な人に、自分の言葉を届けたい。思いを伝えたい。そう強く願う女性たちの生命力溢れる素敵なお話だった。

太平洋戦争中の日本では敵兵の戦意喪失や攪乱を目的としたラジオ放送が行われていた。そのラジオに携わったベティ、エリーザ、洋子の3人。彼女たち番組「ゼロ・アワー」では敵国の捕虜から家族宛の手紙の紹介などが行われ、太平洋前線の兵士らの間で評判になった。兵士たちから“東京ローズ”と親しまれたアナウンサーたちが繰り広げる温かく切ない物語。

作中、敵兵に向けたラジオを放送するとき、エリーザが「心を揺さぶる何か」がないと相手は聞く耳を持たない、伝わらない。と言っていたが、これには演劇にも通ずるものがあるなど考えさせられた。自分の紡ぐ言葉で誰かの心を揺らしたい、という気持ちに大変共感できてお話に真剣に向き合えた。『私の言葉に翼が生えて』というロマンチックな題名と、自分の大切な思いを伝えるというテーマが大変魅力的に感じられた。

また、たくさんの箱を積み重ねた背景のセットがラジオ局の仕事を表現しながら、シルエットになるとビルの立っている街並みのようにも見えたのが印象的、かつ効果的だったように感じる。爆発によって箱が崩れ落ちるシーンでは、仕事場と街の崩壊のどちらも受け取ることができ、焦燥感が強く表現されていた。

劇全体を通して使われていた温かい色の照明が、レトロな雰囲気と戦時中のどこか暗い雰囲気を表現していた。さらに3人で写真を撮る時だけ一瞬光が白くなる演出が、当時の白黒写真を表現していてこだわりを感じた。また、作業机に置いてあった小さなランプが舞台の照明よりワンプンポ遅く消えるところにどこか温かみを感じた。

ラジオを作りながら徐々に親しくなっていく3人の会話にだんだん愛がこもっていくのが魅力的で、戦時中なのに温かい気分になった。だからこそ戦時中というギャップと最後の別れに切なさを感じずにはいられなかった。ドラマを見ているかのようなテンポ感が魅力的なお話であった。戦争中の人を想う気持ちや温かさに、講評委員一同大変感動させられた。

静岡県立静岡城北高校演劇部の皆さん、たくさんの感動をありがとうございました。

